

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔報告〕 RIKKYO Learning Style

における全学共通科目：

講演録平成28年度教育開発シンポジウム学士課程教育における共通教育：次なるステージへ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 一也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002125">https://doi.org/10.57529/00002125</a>

## 第2部 《報告1》

# RIKKYO Learning Style における全学共通科目

佐々木 一也氏 (立教大学文学部教授)

(中山) お待たせいたしました。ただいまから、第2部を開始いたします。第2部におきましては、2016年及び2017年より共通教育、または教養教育の大規模な変更を行いました立教大学、東洋大学、そして本学、國學院大學からの報告をもとに議論を進めていきたいと存じます。

初めに、立教大学全学共通カリキュラム運営センター部長、文学部教授の佐々木一也先生より、「RIKKYO Learning Styleにおける全学共通科目」と題するご報告をいただきます。

それでは、佐々木先生、よろしくお願いいたします。(拍手)

(佐々木) 皆様、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました立教大学全学共通カリキュラム運営センター、長いので「全カリ」と言っておりますが、全カリ部長の佐々木と申します。

本日は、昨年の4月から始まりました立教大学の新しい教育プログラムのお話をさせていただきます。それは「RIKKYO Learning Style」と公式に言いますが、その内容は、立教大学学士課程統合カリキュラムです。準備段階では「学士課程統合カリキュラム」という名称でやってきたのですが、外向けに格好いい名前で宣伝しようというので横文字にしてみた、こういうことでございます。立教風の学びの形というのは、全学共通科目と専門科目を統合的に学習すること、そういう趣旨でございます。

最初に、立教大学の教育理念、建学の精神と教育目的からお話をさせていただきます。立教大学は、まず1874年にアメリカ人の宣教師、チャニング・ムーア・ウィリアムズという方によって、英国国教会系、聖公会と申しておりますが、キリスト教ミッションスクールでございます。この創立者のモットーが「道を伝えて己を伝えず」という、大変奥ゆかしい考え方でございます。それが現在の立教大学の奥ゆかしき、かつ潔癖なスタイルのもとになっているかなというように思います。

キリスト教の精神に基づいて、「人を大事にする」「愛の魂と正義の心」「自由の尊重」、校歌に出てくる文言であります。こういったものを趣旨としております。建学の当初から、リベラルアーツ教育重視の、いわゆる実学でない、非実学系の学校として始まっております。戦後、新制大学になった際に、新制大学の中では比較的早く、一般教育部という

国立大学の教養部のような組織を、特に新たにつくった大学のひとつでございませう。

現在は10学部、3独立大学院研究科で構成されています。それと、もう一つ、今私が所属している「全学共通カリキュラム運営センター（全カリセンター）」が1994年12月から走っております。

教育目的でございませうけれども、「Pro Deo et Patria（神と国のために）」がひとつのキーワードです。「国」というのは、近代国家という意味ではなくて、「社会」とか「隣人」とかという意味で我々は受けとめておりますが、このために働ける、「専門性に立つ教養人の育成」ということになってございませう。もともと1995年まで一般教育部という組織が運営していた一般教育課程、いわゆる教養教育でございませうが、その時代には、大学全体として「教養ある専門人の育成」というものを掲げておりました。リベラルアーツを重視しますが、もちろん専門の学部がありますので、教養がある専門人材育成ということになっておりました。

これが、全カリセンターを立ち上げるときに、新たな理念を構築してひっくり返ったのが、「専門性に立つ教養人の育成」でございませう。これは、学部の意欲に基づく教養教育の再編という機運の中で、1995年の、当時はまだ文、経、理、社会、法という5学部でしたが、それらの学部の教授会の議論・合意によって認められます。

そういうことをやり遂げるときには、中心となる人物が必要だったりすることが多いと思ひますが、そのとき本学には寺崎昌男という立派な先生がいらっしゃいまして、大学教育学会会長や日本教育学会会長等を歴任された先生でいらっしゃいませう。寺崎先生は研究者、教育者としてのメインの時期は東京大学で過ごされたのでありますが、駆け出しは立教大学、また東京大学を定年で退職された後も立教大学、その後、よその私立大学で教職大学院の立ち上げ等にかかわられて5年おられましたけれども、その後、また立教大学という形で、いろいろな形で立教大学に長く勤めて、名誉教授となられていられる方です。こういう方がおられたのが、今、立教大学は全カリを維持できている大きな理由のひとつであろうと思ひます。

基本は「全学が主体となって支える教養教育カリキュラム」ということとございませう。

それでは、全カリセンターとは何ものなのかということの経緯と、その組織の実態について簡単にご紹介をいたします。

全カリセンターは、従来の一般教育課程の運営組織、すなわち一般教育部に対する学部からのもろもろの不満の上に成立をしたという事情がございませう。1991年に『大学設置基準』大綱化が起こるわけですが、実はそれ以前から不満はふつふつと学部の中からわき起こっておりました。それは学部との連絡の欠如、低学年学生への教育権移譲あるいは委託という問題、有機的統合性に欠けるカリキュラムと大学運営、そして、何よりも一般教育部が1・2年生の教育を完全に独立し自立した請負組織のように行なっており、手が出せなかったということが、学部からするとあったからです。

それが、大綱化を受けまして、5学部の議論が活発になった。この学部代表者の合議に

よって教養教育専任担当組織（一般教育部）の解体、つまり「教養教育科目だけを持つ教員の組織をつくらない。そういう教員は本学には置かない。教養教育は5学部が協力して、全学が主体となって行う」ということを決定いたしました。そして、新しい組織をつくり、カリキュラムをつくるということ、5学部の合意で行いました。それが現在に至るまで、全カリセンターが20年続いているということの根拠であろうと思われます。

1995年3月に一般教育部そのものは解体されてなくなるわけですが、それを待たず、その前年の冬、1994年12月に、新カリキュラム構想組織としての全カリセンターが設立されております。つまり、二重の体制にこの期間はなっていたということです。もうちょっとはっきり言ってしまいますと、一般教育部は存在はしていますけれども、教養教育に係るカリキュラムを考えたり担当者を決めたりという権限を剥奪してしまった、と言ったほうがわかりやすいかもしれません。全カリセンターが一般教育部にかわってそれを行う、断行する、そういう体制が5学部の合意によってつくられたということでございます。

さて、組織ですが、どういう形になっているかといいますと、別紙の資料がございます。青いカラー刷りのものです。そちらをご覧くださいと思います。これが現在の全カリセンターの組織図ということになります。一番上に総長がおりまして、総長というのはいわゆる学長です。その下に「部長会」という、全学の全ての案件を扱い、そこで決定したものが大学の方針として実行されるという、非常に長い会議がございます。午後1時に始まって、終了は遅いときには8時ぐらいまで、そういう会議を毎週やっているという凄いものでありますが、そういう会議体がございます。

この会議には私も出ております。その下に「全カリ委員会」というものがございます。これは「全学共通カリキュラム運営委員会」というのが正式な名称でございますけれども、これが部長会の会議と重ねて行われております。つまり、メンバーは同じということですね。全学部長と事務系の部長、それに副総長の何人かが毎回出ております。正式メンバーは全カリ部長と副部長、「言語系科目構想・運営チーム」「総合系科目構想・運営チーム」のそれぞれのチームリーダー、それに、各学部の学部長、それと教務部長です。多くの部長たちがいる中で、そのまま席を動かさず行われます。ほかのメンバーは総長を含めて陪席者として出席します。陪席ですが、自由に意見を言えるというのが我が大学の陪席のルールでありまして、そういうところで会議を行います。

司会は私が行い、全学共通カリキュラムの運営、具体的に個々の科目の担当者の決定も含めて、全部そこにかかけます。「皆さん、よろしいですね？はい、決まりました」という形で進めてまいりますので、細かいところまで全部全学の合意をもとにできているという仕組みになっております。これが組織です。

それぞれの囲みのチームの下に、言語のほうですと、「教育研究室」というのがございますし、総合のほうも「サポートグループ」というのがございますが、これは関係する学部から選出されて出てきている教員たちです。こういう教員たちが実際に全学共通カリ

キュラムを考え、実行する中心のメンバーとして動いております。

さらにその下、「サポーター」というグループが総合チームの下についてございますね。これは、学部と全カリとを結ぶ役割をしてくださる方々です。「サポートグループ」とか「教育研究室」のメンバーは、全カリの内部の人間として活動しています。それに対して、「サポーター」は学部と全カリのつなぎ役ということで、どちらかという学部の方の立場で動いていると、そういう役割を持っております。

こういうたくさんの教員がかかわって、全カリセンターは運営されて、動いているということです。文字どおり全学が支えるという形になっております。

さて、それでは、全カリの特徴と課題、学生から、教員から、それぞれ見えるものをご紹介します。まいりたいと思います。

まず、学生から見た特徴と課題です。従来、2016年4月以前なのですが、4年間にわたる2本立てのカリキュラムになっていました。専門と全カリということです。学生は専門、全カリという言い方をして“パンキョウ”とは言いません。うちでは“ゼンカリ”という言い方をしていたのですが、それぞれ膨大な科目数、カリキュラムを持っています。立教大学は全体で8,000以上の授業コマを展開しています。全カリは3,700コマぐらいあります。立教では全体の半分近くが全カリセンターで運営しているコマ数なのです。ですので、相当分厚い履修要項になります。従って、学生は専門学部の自分の所属している履修要項、シラバス——別冊のかなり分厚い全カリの履修要項をシラバスと呼ぶのですが、それをもろうことになっていました。

ですから、4年間、常に2冊の履修要項、シラバスを見ながら生活をするという形になります。そうすると、意識からして、「4年間一貫して立教は専門性に立つ教養人を育成するんだよ」と言っても、専門は専門、全カリは全カリというふうに学生はなってしまう。教員は、後で紹介しますが、全教員が全カリの科目を担当しなければいけないというルールになっているのです。担当しなくてもいいという先生は一人もいない、これが立教の専任教員のルールであります。従って、学生は他学部の教員の授業にたくさん出るとい形になります。ということで、結構全学融合的にやっているのですが、学生の意識としては、全カリは全カリ、専門は専門と、こういうふうになっておりました。

また言語は2言語必修が全学部共通なのですが、必修は1年次のみなど、いろいろ問題はございます。そこで、特に、パワーポイント資料の下から3番目ですけれども、言語学習意欲の二極化が生じてしまいます。意味づけが曖昧な言語学習は専門とつながっていないので、「俺、何のためにやっているのかな」という意識ですね。それと、総合科目のほうも、「安易で無秩序な」と書いてしまいましたが、総合科目とはいえ、みずから統合しないばらばらの知識になってしまうといううらみはあります。結局、専門の学修と全カリ学修がうまく結びつかず離れてしまっているということになりがちでした。もちろん、全カリの科目選択の幅が非常に広いことは、学生にとっても評判がよいのですが。

一方、教員の側で見ても特徴と課題がありました。他学部生との他流試合で「結構ほか

の学部の学生を教えてみると、おもしろいよ」という先生もいたり、「自分の専門を見直すきっかけになった」とか「非常に鋭い質問が専門外の学生からあった」など、全カリ科目担当に積極的意味を見出す例もあるのですが、一方では、「専門性の不足する学生をどうやって教えたらいいのだろう」、という不安と難しさがありました。あるいは、言語科目を担当している先生方の苦悩としては、「英語は当然勉強するとはいえ専門性とどうつながっているのかわからない」、反対に学部の方の教員は「全カリで教えられている英語では一体何をやっているか、どういうふうに教えられているのか、ほとんど分からない」というようなこともありました。

特に、「言語B」と言っている第二外国語について言えば、学生は期待して入学してきます。しかし、実際に習ってみるとついていけないとか、「これをやって何になるのだろう」とかということがあって、理想と現実には大きな落差がある、ということで、教員の方から見ても、全カリ教育と学部教育、両方やりながらも、何かつながらないなという実感が出てきております。

そこで、統合カリキュラムを考えなければいけないという機運になってまいりました。学生のほうから見ますと、1つのカリキュラムというわかりやすい学習課程になってくれるとありがたい。言語を勉強しながら専門をやって、全カリの他学部の先生が担当する総合系の科目を学習すると、専門科目や他の科目にどういうふうにつながって、自分の中で一つになってくるのか、ということが統合的に見えるような、そういうカリキュラムになったほうがありがたい、ということがあります。所属学部と立教大学全体の両方の科目群を自然に学べるようにということです。

それと、特に入学生、1年生にとっては、何の前触れもなく、いきなり大学に入ってきて自分の学びとそのための科目を「選択しなさい」というふうにされるわけですね。大学の授業というのはどういうものであって、どういうふうに勉強しながら、どんなふうにレポートを書いて、どんなふうに試験をやって、評価されるということを、1つの授業で懇切丁寧にやって見せてくれる授業はなかったのです。従って、そういうものを導入する。

あるいは、主体的な学修意欲をどうやって身につけるかとか、あるいは「専門で学んだけれども、一体これは世の中に出てどういうふうに生きるのだろうか？」という意味で、自分の学びの成果を確かめてみたという学生もいます。意外に全カリでは4年生の履修が総合系の科目では多いのです。これは、もちろん単位が足りなくてという学生もいますが、そういうネガティブな動機だけではありません。4年生で熱心に出てきている学生の成績は非常によいです。これは、1年生や2年生の比ではありません。答案も、レポートも非常にしっかりとしたものを書いてきます。4年生になって改めて、自分の勉強してきた分野の知識を、他の分野と照らし合わせて確認したいという学生は少なからずいるのです。それはこれまでの全カリ運営の経験からわかっております。

さて、今度は視点を変えて大学運営の観点から見ますと、一貫した学士課程教育の構築という課題は、文部科学省をはじめ外から降ってきたようなものですがけれども、自分の学

部の学士課程教育の内容を知らないでは済まされません。また「学生を社会人として育成する」という意識は「学力というものに質的保証を与える責任が教員にあるのだ」という意識に変わらなければなりません。

それから、グローバル化を控えて、言語能力向上は、学部の学科教育にどうつながっていくのだろうかということもきちんと自覚して、学生をトータルに伸ばしてやらなければならない、と、いろいろなことがございます。

うちの大学——どこの大学もそうだと思うのですが、学生は放っておくと遊んでしまいますけれども、きちっと学ばせるとそれなりに伸びていくということは、ちょっと調べるとわかることです。「もうちょっと何かやらせれば、何とかなる」と、いう認識が教員の側にありました。そこで、総長のリーダーシップがあって、全学的検討を時間をかけてやりましたけれども、それで2016年4月から実施ということになりました。

では、どのような組織でそれを実現するのかということが次に検討されました。当初、統合管理は、全カリと専門を融合するのだから、両者の上につくるべきだという考え方になりました。責任者は総長の意を受けた副総長がやるという考え方もありました。しかし、全カリから対案を提出しました。この全カリ対案は私が出したのですが、全カリセンター部長は学部長と同等であり、統合カリキュラムの運営でもその対等な関係が重要だと強調しました。そして、全カリ部長が座長となって、専門カリキュラムと全学共通カリキュラムの融合と統合のための協議の場を主催し、こういう場からこそカリキュラムの統合はできてゆく、と申しました。上からの命令で学部を動かすのは、立教大学の風習に合わないですから、「20年協力してやってきたのだから、これからもみんなでやろうじゃないか」ということです。

結局それが採用されて、現在そういう形で動かしております。統合カリキュラムは全カリの進化形であり、全学部が主体なのだという趣旨になっております。

そこで、「RIKKYO Learning Style」の特徴になります。まず、学部と全カリの2冊の履修要項をやめました。履修要項は学部の学生は1冊しかもらえません。それが自分の学部にかかわるすべてを含んだ履修要項です。自分の履修要項の卒業要件単位表のところは、必修科目、選択科目、自由科目という単純な分け方になっておりまして、それぞれに全学共通科目と専門科目が、必須科目にはどれどれ、選択科目にはどれどれ、自由科目にはどれどれという感じに入っている形になっています。卒業要件単位表は一本化されているということですね。

それから、学生のほうから見て「全カリ」という名称はなくなりました。それは残念だという声も一部ありましたが、「いや、全カリというのはなくなったほうがいい。自分の大学での勉強、それだけでいい」というふうになりまして、見えなくなりました。

それから、2年次以上の言語学習の動機づけを強化するというのが特徴です。これは学部専門科目と連動させる言語教育であり、現在も全学部で実現を目指して準備中です。

さらに、使用言語としての英語の強化。つまり、英語による開講科目を増やそうという

ことも「RIKKYO Learning Style」の特徴です。これは共通科目についても、専門科目についても、いずれの側からも行われて、いずれ2年次以上の言語というところでも共通科目と専門科目のつながりを実現する計画です。これは現在進行形で、鋭意検討が行われています。

専門性を軸とした柔軟な知的適応力としての教養という考え方も、そこに加味されてきました。教育目標である「専門性に立つ教養」なのですけれども、専門性を軸とした柔軟な知的適応力ということで、専門だけきちっと勉強するのではなくて、それから離れていくような分野も、つながりの中で身につけていくという発想です。

さて、カリキュラムの構造としてはどうなっているか。かいつまんで言いますと、「導入期」、「形成期」、「完成期」という3期に4年間の学修全体を分けました。

導入期は1年の春、半年です。形成期は1年の秋から3年春、または3年の秋です。完成期は3年の秋学期、3年の後半から卒業まで、または4年だけという学部もあります。

そして、もうひとつの特徴として多彩な学び、第6カテゴリーの新設があります。総合系の科目に「学びの精神」と「多彩な学び」という2つのジャンルがあるのですけれども、「多彩な学び」が総合系の主力科目群になります。「学びの精神」は導入期に特化した科目で、後でご説明します。「多彩な学び」に「グローバル・リーダーシップ科目」「サービスマーケティング科目」というのがありまして、こういうものを増強しております。これはアクティブラーニング系の科目で、大学の外に出て、実際に何か体を動かして学んでいくという、そういう科目を新設して集めてあります。身体を動かして社会に寄り添える人を育てたい立教の重要科目になると期待されています。

次に、「学びの精神」が一体どういうものかご説明いたします。別紙の先ほどの組織表の裏をごらんください。

「学びの精神」は2科目4単位必修です。これは1年次春学期推奨ですが、推奨というのは、他のものを取れないので、取らざるを得ないようになっているということです。そして、これは全学部だけではなくて、部局（研究所や図書館、学生部、キャリアセンター、資料室等）がアイデアを出し合って、1年生に入った立教の学生に大学生として最低限身につけてほしいもの、しきたり、エチケット、そういうものを教えようとする科目です。

学生には、自学部提供以外の科目の履修を推奨しておりますけれども、立教を理解するための自校教育的なものも入れております。高校生にもわかるようなレベルで、講義を聞いてノートにとり、グループワークも経験し、リアクションペーパーを書き、フィードバックも受け、複数の中間レポートを提出して、返却もされて、最後に持ち込み不可の試験を受けると、この形を義務化しているのです。講義に導入する手法は何を採用してもいいのですけれども、最後の「持ち込み不可の試験」だけは一律にすべての科目で行うことに決めました。

これらの科目を運営するためには、それなりの制度的な裏づけが必要です。学部教員数に応じて学部責任科目数を割り振っています。「専任担当ルール」と言っています。「何学

部は何コマ出してください」というように部長会で決めるので強制力があります。内容や担当者の決定は学部の責任です。それから、ペーパーのやりとりの多さ。つまりリアクションペーパーを書かせてそれを評価するとか、中間レポートを出してそれが返ってくるとかということなので、それらを専門に読むTA制度を導入しました。これは大学院生が担当しますが、それでは足りないので、学外者もこういう仕事をしていただこうと、「教育コーチ」という制度を全カリセンター専用で導入したりしました。これは、普通のTAより報酬が高くコストもかかるのですが、この科目の実効性を増すために敢えて導入しました。

共通科目の普通の科目では、授業規模を抽選で300人上限としていますが、「学びの精神」ではこれを上限200人で切って、平均120人程度を想定し、実際には50人、60人でやっている授業が結構多いのが実情です。その他、準備のための費用も考えております。授業ごとに図書資料費が使えます。

もう一点、「RIKKYO Learning Style」では「グローバル教養副専攻」という副専攻コースが、今回新たに導入されました。この趣旨は、別紙がありますので、後でご覧いただければと思います。概要だけ言いますと、全学的規模で、卒業要件以内で修了可能な副専攻コースです。これは総長名の修了証書がもらえます。「卒業証書と並んで重要である」というふうに、立教では位置づけたいと考えています「日本発信科目」、「基幹科目」、「言語力科目」の3系列から、コーステーマごとに所定の単位を合計26単位修得します。海外体験を必ず行わなければなりません。これは、単位を前提にしなくていいのですけれども、海外へ必ず行くということです。「日本発信科目」は、外国に行くのだから、日本のことを外国へ行って伝えられる科目、「基幹科目」はコースのテーマに沿った科目。そして、「言語力科目」といまして、外国に行くのだから、言語力を強化する科目を必ず何単位かとらなければいけないということで、2年次以降の英語以外も含めた言語の学習を促そうという仕組みになっています。

グローバル教養副専攻の運営は、全カリの中の組織で運営します。

「Language & Culture Course」と「Arts & Science Course」がありますが、全カリ副部長が責任者となって運営します。

以上のような手法で学生の主体性を引き出そうというのが「RIKKYO Learning Style」の狙いなのです。

学生の主体性を引き出す「学びの精神」の趣旨としては、私語のない講義などの授業環境をみずからつくり出すとか、多様な仕方で積んだ知的経験をまとめて、論述試験で評価されることの意味を知るとかということです。もうひとつ言うならば、正課授業の中に居場所を見つけるということです。それから、もうひとつ、第一志望でない入学者はどこの私立大学も多いわけですが、早く自信を回復し、帰属意識を持つ、大学で学ぶ意義を自覚し、4年間を積極的に過ごせるようになる、こういうことが狙いです。

「グローバル教養副専攻」の狙いはどういうことかといいますと、学部の壁を超えて、よその学部の先生の意見を学んだりしながら、おもしろいことを知り、学ぶ。日本以外の

ところへ行きますので、言語、外国語を学ぶということの重要性を認識してもらい。あるいは、具体的な問題解決のために未知な領域への挑戦も必要ということ、いろいろな体験から気づいてもらう。「ただ、なんとなく大学で過ごしてもだめなんだ」ということに早く気づいて、それで、卒業するとき、「ああ、もっと勉強しておけばよかった」と思うのではなく、「今、学びたい」というようになるような仕組みであるつもりでございます。ポートフォリオについては、どこの大学でもあると思いますので、ご覧ください。

大急ぎになりましたけれども、以上です。まとめますと以下の通りです。「RIKKYO Learning Style」は、リベラルアーツ尊重に基づく全カリセンター20年の活動があって、初めて可能になった。鍛えればできるようになる学生・全ては学生のためにという校風があった。10学部の主体性と全カリセンターとのほどよい緊張関係。両者間には常に緊張関係があるのですが、維持されている。あるいは、職員と教員が非常に協働しやすい雰囲気がある。歴代総長が支持してくれて、その維持発展のために指導力を発揮してくれた。「多大な時間と労力をかける常に現在進行形の多様性の相互融合」と資料にありますが、これは立教大学のあらゆるところに行き渡っている運営スタイルなのです。そして、立教の正課と正課外の全てを投入した総がかりの体制ができているということです。

大変駆け足で、しかも時間をオーバーして、大変申しわけございません。簡単でございますが、立教大学の様子をご紹介させていただきました。どうもありがとうございました。

(拍手)

<h2>RIKKYO Learning Style における 全学共通科目</h2> <p>—カリキュラムの有機的統合への挑戦—</p> <p>立教大学 全学共通カリキュラム運営センター部長 文学的統御 <b>佐々木一也</b></p>	1
--	---

<h2>目次</h2> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 立教大学の教育理念</li> <li>・ 立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)</li> <li>・ 全カリの特徳と課題</li> <li>・ RIKKYO Learning Styleへの道</li> <li>・ RIKKYO Learning Styleの特徴</li> <li>・ 「学びの精神」</li> <li>・ グローバル教養副専攻</li> <li>・ 学生の主体性を引き出す</li> <li>・ まとめ</li> </ul>	2
--	---

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 立教大学の教育理念 建学の精神 教育目的</li> <li>・ 立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)</li> <li>・ 全カリの特徳と課題</li> <li>・ RIKKYO Learning Styleへの道</li> <li>・ RIKKYO Learning Styleの特徴</li> <li>・ 「学びの精神」</li> <li>・ グローバル教養副専攻</li> <li>・ 学生の主体性を引き出す</li> <li>・ まとめ</li> </ul>	3
---	---

<h2>立教大学の教育理念 建学の精神</h2> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1874年、アメリカ人宣教師のM.ウリアムにより創設、英国国教会系学校(聖公会)のミッションスクール。「道を広げて己を拓かず」</li> <li>・ キリスト教精神に基づき人を大切にし、愛の情と正義の心、自由の尊重</li> <li>・ 当初からリベラル・アーツ教育重視の大学(詳実学典)</li> <li>・ 一般教育部の設置(1925年4月～1925年3月)</li> <li>・ 現在10学部・3独立大学院研究科で構成             <ul style="list-style-type: none"> <li>文、経済、理、社会、法、観光、コミュニケーション福祉、経営、現代の理、異文化コミュニケーション</li> <li>21世紀社会デザイン、ビジネスデザイン、医療</li> </ul> </li> <li>・ 全学共通カリキュラム運営センター(1994年12月～)</li> </ul>	4
---	---

<h2>立教大学の教育理念 教育目的</h2> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ “Pro deo et patria” 神と國(社会・個人)のために働く。</li> <li>・ 「専門性に立つ教養人の育成」</li> <li>・ 一般教育時代(～1995)の理念「教養ある専門人の育成」</li> <li>・ 全カリセンター立ち上げ時に新たな理念の構築</li> <li>・ 1995年当時「学修の意思による</li> <li>・ 学部の意欲に基づく教養教育の再編</li> <li>・ 初代全カリセンター部長・寺崎昌男名誉教授の主導</li> <li>・ 全学部が主体的に支える教養教育カリキュラム</li> </ul>	5
--	---

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 立教大学の教育理念</li> <li>・ 全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)経緯 組織</li> <li>・ 全カリの特徳と課題</li> <li>・ RIKKYO Learning Styleへの道</li> <li>・ RIKKYO Learning Styleの特徴</li> <li>・ 「学びの精神」</li> <li>・ グローバル教養副専攻</li> <li>・ 学生の主体性を引き出す</li> <li>・ まとめ</li> </ul>	6
---	---

<h2>全学共通カリキュラム運営センター 経緯</h2> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 従前の一般教育課程運営組織(一般教育部)への不満             <ul style="list-style-type: none"> <li>学修との連絡の欠如、若学年学生の教育権委託、有機的統合性に欠けるカリキュラムと大学運営、独立した職員組織に</li> </ul> </li> <li>・ 大学設置基準大綱化(1991年)を受けて</li> <li>・ 全学5学部(的隣後、学部代表者の合議により教養教育専任担当種別解体および学部主導の教養教育組織およびカリキュラム構築を決定) ⇒ 全カリセンターの不甘心</li> <li>・ 一般教育部解体(1995年3月)を機に、旧一般教育課程運営組織として全カリセンター設置(1994年12月)、新カリキュラム構想開始</li> <li>・ 全学共通カリキュラム(全カリ)実施(1997年4月)</li> </ul>	7
---	---

<h2>全学共通カリキュラム運営センター 組織別経緯資料</h2> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5学部と一般教育部の精鋭部隊で発足⇒現在は10学部で構成</li> <li>・ 総長の一言した支援</li> <li>・ リベラル・アーツ教育を重視する伝統、「全学で支える全カリ」の誓い</li> <li>・ 教員の二重派遣→学部+全カリ、「専任教員担当ルール」</li> <li>・ 運動体、教員相互切磋の場、永続的FD、</li> <li>・ 文→法→社会→理→文→経営→文→文、部長の全学的継承</li> <li>・ 全カリ運営委員会は10学部長が委員で、全カリ部長が委員長</li> <li>・ 立教精神と全カリの意味を体現した活動の源である職員の方             <ul style="list-style-type: none"> <li>⇒10学部が支え、運営者を提供して、全学の立場で活動する組織</li> </ul> </li> </ul>	8
---	---

<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教大学の教育理念</li> <li>・立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)</li> <li>・全カリの特徴と課題 学生 教員</li> <li>・RIKKYO Learning Styleへの道</li> <li>・RIKKYO Learning Styleの特徴</li> <li>・「学びの精神」</li> <li>・グローバル教養副専攻</li> <li>・学生の主体性を引き出す</li> <li>・まとめ</li> </ul> <p style="text-align: right;">9</p>	<p style="text-align: center;">9</p>	<h3>全カリの特徴と課題 学生</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4年の二本立てカリキュラム＝専門＋全カリ</li> <li>・1年次で終わる二種言語科目の必修＝2年次以降アカラットへ</li> <li>・4年次まで9科目必須の多様な総合科目660コマを自由に選択</li> <li>・全学部全学年対象、他学部他学年生との交流機会</li> <li>・他学部専任教員に触れる機会</li> <li>・言語学習意欲の二極化＝意味づけの曖昧な言語学習</li> <li>・容易で無秩序な総合科目選択＝自ら統合できないレベルの知識</li> <li>・＝専門学修と全カリ学修の専横</li> </ul> <p style="text-align: right;">10</p>	<p style="text-align: center;">10</p>
<h3>全カリの特徴と課題 教員</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他学部生との他意識</li> <li>・教育力向上とカリキュラム開発の意識喚起</li> <li>・全カリ制度への意欲の二極化</li> <li>・初学部学生との交流を有意義かつ面白いと感じる教員</li> <li>・専門性の不足する学生への教育に戸惑う教員</li> <li>・言語和言語他教員の苦悩</li> <li>・専門性への模索しのない英語科目への学修の無関心</li> <li>・期待と現実の落差の大きな言語科目(部)外国語)</li> <li>・全カリ教育と学部教育が専横しがち</li> </ul> <p style="text-align: right;">11</p>	<p style="text-align: center;">11</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教大学の教育理念</li> <li>・立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)</li> <li>・全カリの特徴と課題</li> <li>・RIKKYO Learning Styleへの道 学生 教員 運営組織</li> <li>・RIKKYO Learning Styleの特徴</li> <li>・「学びの精神」</li> <li>・グローバル教養副専攻</li> <li>・学生の主体性を引き出す</li> <li>・まとめ</li> </ul> <p style="text-align: right;">12</p>	<p style="text-align: center;">12</p>
<h3>RIKKYO Learning Styleへの道 学生</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとつの学部正課カリキュラムというわかりやすい学習過程へ</li> <li>・所属学部と立教大学全体の両方を自然に学べるように</li> <li>・立教および大学文化へのソフトランディング⇒導入期</li> <li>・卒業後の学主力全面につながる自覚的、主体的学修⇒形成期</li> <li>・意義と動機付けの明確で効果のみえる言語学習</li> <li>・固有の学主力につながる一貫性のある共通科目履修</li> <li>・専門学修の有効性を試すための他学部との必要⇒完成期</li> <li>・高学年対象の学際的テーマをもつ演習</li> <li>・グローバル生に対応する自覚の喚起⇒グローバル教養副専攻</li> </ul> <p style="text-align: right;">13</p>	<p style="text-align: center;">13</p>	<h3>RIKKYO Learning Styleへの道 教員</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4年制の一貫した学士課程教育の構築という課題</li> <li>・専門外分野教育を含めた学生⇒社会人育成という意識</li> <li>・卒業時の学主力に質的保証を与える責任の自覚</li> <li>・言語能力向上の学部学科教育目標における明確な位置づけ</li> <li>・学生のライフキャリアに資する専門性、教養という観点からの反省</li> <li>・「きちんと勉強させれば伸びる学生たち」という認識</li> <li>・教員のリーダーシップと全学的検討(2010年10月～2014年3月)</li> <li>・2014年4月実施具体案検討開始 ⇒ 2016年4月実施</li> </ul> <p style="text-align: right;">14</p>	<p style="text-align: center;">14</p>
<h3>RIKKYO Learning Styleへの道 運営組織</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・10学部と全カリセンターが協力的に連携する運営の場</li> <li>・最初案＝独立した統合カリキュラム運営組織・責任者は副総長</li> <li>・全カリ対策＝全カリセンターと全カリ運営委員会が担う</li> <li>⇒全カリ案採用</li> <li>・全カリセンター部長は学部長と同等</li> <li>・委員長である全カリセンター部長が専門カリキュラムと全学共通カリキュラムの融合と統合のための協議の場を主催する。</li> <li>・統合カリキュラムは学修を前提した上位組織からの統制によらず、10学部自らが相互交渉の場を持ち構想・運営を行うべき</li> <li>・統合カリキュラムは全カリ運動の進化形＝全学部が主体</li> </ul> <p style="text-align: right;">15</p>	<p style="text-align: center;">15</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教大学の教育理念</li> <li>・立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)</li> <li>・全カリの特徴と課題</li> <li>・RIKKYO Learning Styleへの道</li> <li>・RIKKYO Learning Styleの特徴 全体 カリキュラム構造</li> <li>・「学びの精神」</li> <li>・グローバル教養副専攻</li> <li>・学生の主体性を引き出す</li> <li>・まとめ</li> </ul> <p style="text-align: right;">16</p>	<p style="text-align: center;">16</p>

<p><b>RIKKYO Learning Styleの特徴</b> 全体</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部と全カリの2層の履修表項 ⇒ 学部の履修表項1番のみ</li> <li>・科目区分「必修科目」「選択科目」「自由科目」</li> <li>・それぞれに「全学共通科目」と「専門科目」が分類される。</li> <li>・一体化した卒業要件単位置</li> <li>・学生から見て「全カリ」名称の非可視化</li> <li>・2年次以上への言語学習動機づけの強化</li> <li>・使用言語としての英語強化(英語による履修科目増加努力)</li> <li>・「専門性を軸とした柔軟な知的適応力としての教養」という考え方</li> </ul> <p style="text-align: right;">17</p>	<p><b>RIKKYO Learning Styleの特徴</b> カリキュラム横断</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3層区分、正課外・学外への広がり、一貫した国際意識と海外体験</li> <li>・導入期(1年春学期)</li> <li>・「学びの精神」「言語」「スポーツ」「学びの技法」+専門入門的科目</li> <li>・形成期(1年秋季学期～3年春学期または秋学期)</li> <li>・「多様な学び」「言語」「スポーツ」+専門主要科目</li> <li>・完成期(3年秋季学期または4年春学期～卒業)</li> <li>・「立教ゼミナール(必修)」「専門上級科目(1～2ゼミ、卒業など)</li> <li>・「多様な学び」第2カテゴリー「私達の現場」(PBL、AL、体験型)</li> <li>・グローバル・リーダーシップ科目、サービス・ラーニング科目</li> <li>・グローバル教養副専攻(2年次から)</li> </ul> <p style="text-align: right;">18</p>	17
<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教大学の教育理念</li> <li>・立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)</li> <li>・全カリの特徴と課題</li> <li>・RIKKYO Learning Styleへの道</li> <li>・RIKKYO Learning Styleの特徴</li> <li>・「学びの精神」 教養 支える仕組み</li> <li>・グローバル教養副専攻</li> <li>・学生の主体性を引き出す</li> <li>・まとめ</li> </ul> <p style="text-align: right;">19</p>	<p><b>学びの精神</b> 組別別級科目名資料</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2科目4単位の必修・1年次春学期履修</li> <li>・全学部および教職(研究科)や図書館、学生部、キャリアセンター、立教大学運営資料室などがアイデアを出して立教大学の学生として活動の心構えは「アーマ」がそれぞれが設定(37科目120コマ)</li> <li>・学生には前学期提供以外の科目の履修を推奨</li> <li>・立教を理解するための自教教育的要素の強い科目も設定</li> <li>・高校生にもわかるようなレベルで、講義を聞いてノートを取り、グループワークも経験し、毎回リアクションペーパーを書き、そのフィードバックも受け、授業の中間レポートを提出して英語も受け、最後に誇ら込み不可の試験を受けて単位認定を受ける</li> </ul> <p style="text-align: right;">20</p>	19
<p><b>学びの精神</b> 支える仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部教員数に応じて学部責任科目数を割り振り</li> <li>・内容・担当者決定は学部の責任で</li> <li>・ペーパーのやり取りの多さから、レポートの下読み、リアクションペーパーの下書きができるように ⇒ シニア1A組互導人</li> <li>・学科者も履修可能な教育コーチ制度(全カリセンター専用)導入</li> <li>・「多様な学び」300上版定員に対して200上版、平均120程度を想定</li> <li>・授業単価の固定額入費など卒業費の予測化(80万円)</li> <li>・全科目に最終筆記試験を義務化</li> </ul> <p style="text-align: right;">21</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教大学の教育理念</li> <li>・立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)</li> <li>・全カリの特徴と課題</li> <li>・RIKKYO Learning Styleへの道</li> <li>・RIKKYO Learning Styleの特徴</li> <li>・「学びの精神」</li> <li>・グローバル教養副専攻 全体的特徴 L&amp;C Course A&amp;S Course</li> <li>・学生の主体性を引き出す</li> <li>・まとめ</li> </ul> <p style="text-align: right;">22</p>	21
<p><b>グローバル教養副専攻</b> 全体的特徴別級資料</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全学的規模で卒業要件内で修了可能⇒根長名の修了証書</li> <li>・3系列からコーステーマごとに所定の単位修得・総計20単位</li> <li>・海外体験必須・4年間で一度は日本を出る経験を認定</li> <li>・日本英語科目(第1系列)・日本からグローバルに英語できる教養</li> <li>・基幹科目(第2系列)・学部横断的で決まったテーマを持った履修</li> <li>・言語力科目(第3系列)・異文化強化科目・英語学内学力伸び度測定テスト(TOEIC)的受験促進・言語&amp;継続学習動機づけ</li> <li>・Language &amp; Culture Course、Arts &amp; Science Course、Discipline Course</li> <li>・全カリ内「グローバル教養副専攻構想-運営サブチーム」が運営</li> </ul> <p style="text-align: right;">23</p>	<p><b>グローバル教養副専攻</b> Language &amp; Culture Course</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全カリ言語チーム提供</li> <li>・言語継続学習・全カリ言語系内制度 ⇒ 全学的制度</li> <li>・言語関連地域での海外体験必須化</li> <li>・全学共通科目言語系を中心に構成</li> <li>・英語・Academic Studies in English、World Issues in English、Communication in English</li> <li>・言語&amp; German Language &amp; Cultureなど、他・仏・西・中・韓の5言語</li> <li>・言語学習の学修科目との融合方針については現在さらに検討中</li> <li>・言語力科目系列を中心に履修</li> <li>・海外体験は海外留学・海外留学研修を認定</li> </ul> <p style="text-align: right;">24</p>	23

### グローバル教養副専攻 Arts & Science Course

- ・全カリ総合テーマ提供
- ・総合系科目のランダム履修からテーマのある一貫的履修へ
- ・テーマ Global Art Experience, Global Studies of Nature & Environment, Global Citizenship, Global Sports, Global Humanity, Global Social Experience, Global Mind, Global Studies of Region
- ・日本発信科目系列に英語による日本研究科目＝F科目増設
- ・通称科目系列は総合系「多様な学び」の科目群から
- ・言語力科目系列は全学共通言語自由科目や海外処遇留学などから
- ・海外体験は自主企画を含めて、要件を満たす自由な活動を認定

25

25

- ・立教大学の教育理念
- ・立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)
- ・全カリの特徴と課題
- ・RKKYO Learning Styleへの道
- ・RKKYO Learning Styleの特徴
- ・「学びの精神」
- ・グローバル教養副専攻
- ・学生の主体性を引き出す 学びの精神 グローバル教養副専攻 e-ポートフォリオ「立教時間」
- ・まとめ

26

26

### 学生の主体性を引き出す 学びの精神

- ・大学講義スタイルへ適応しアクティブラーニングに主体的に対応する
- ・事前事後課題により目標を持って出席し、授業から考えることを学ぶ
- ・礼儀のない講義に慣れ、授業環境を自ら作る
- ・様々な仕方で様々な知識的経験を取りまとめ、論議試験で評価されることの意味を知る
- ・大学という空間に慣れ、正課活動に友人や居場所を確保する
- ・第一志望でない入学者も、大学組織や教員から暖かくかつ厳しい支援を受けることによって、自信を回復し、早く卒業履修を持つ
- ・大学で学ぶ意義を自覚し、4年間を積極的に過ごす

27

27

### 学生の主体性を引き出す グローバル教養副専攻

- ・学部の壁を越えて面白いことを知り、学べるがわかる
- ・日本語以外の言語の必要性を思い知り、積極的に英語や初習言語の学習を継続できる
- ・異文化体験の衝撃を受け、自分の将来に危機感を持って進むべき方向を選択することができる
- ・目前の問題解決のために未知な領域への挑戦が必要であることを悟る
- ・テーマの関連性から専門学修を具体的場面でより深く活かせる学生力に変換できる
- ・自力で生きることの実質的な意味を体得する  
⇒ 大学でもっと学びたいくなる

28

28

### 学生の主体性を引き出す e-ポートフォリオ「立教時間」

- ・2017年4月一部運用開始、2018年4月完全運用開始予定(準備中)
- ・蓄積されるRKKYO Learning Styleで学修したすべての成果情報を随時確認して、自らの学修の検証とより効果的な次の学修につなげる
- ・大学との双方の適宜に参加して、大学からの情報開示を受けると同時に、大学からの調査依頼に応えたり、授業担当者への積極的接触を図ることができる
- ・「導入期」科目などでの積極的な活用を通じて、自分の学修結果を直視し、それを次の選択行動につなげる行動を繰り返すようになることから、4年間の一貫した自己形成、「学生力」構築に貢献する学生生活を送ることができる

29

29

- ・立教大学の教育理念
- ・立教大学全学共通カリキュラム運営センター(全カリセンター)
- ・全カリの特徴と課題
- ・RKKYO Learning Styleへの道
- ・RKKYO Learning Styleの特徴
- ・「学びの精神」
- ・グローバル教養副専攻
- ・学生の主体性を引き出す
- ・まとめ

30

30

### まとめ

RKKYO Learning Styleは

- ・リベラルアーツ専攻に基づく全カリセンター20年の活動
- ・「認めればできるようになる学生」「すべては学生のために」の校風
- ・10学部の実践性と全カリセンターとの程よい関係関係
- ・教員と職員との協働のしやすい雰囲気
- ・学長部長の支持と指導力
- ・多大な時間と労力をかける素に現在進行形の多様性の相互融合
- ・立教の正課と正課外のすべてを投入した総力がかり体制の上で初めて可能になった

31

31

### ご清聴ありがとうございました

立教大学  
全学共通カリキュラム運営センター部長  
文学部教授  
佐々木一也

32

32